

道の途上にて

ボランティアセンター長 中川 英樹

ここに2022年度のボランティアセンターの活動報告書をお届けいたします。私たちは、未だコロナ禍の直中を歩んでいます。その期間はもう約3年に及んでいます。完全な収束はおそらく見込めないであろう、そうした状況下であって、しかし、世界が困難を抱えた今だからこそ、「何かしたい」「何かできる」と、今年、学生たちは大きく動きはじめました。この2022年度報告書には、「何もできない」と想えたことの中に芽生えた「何かしたい」「何かできる」…… そう湧き上がった、学生たちの想いと、それをサポートしようとした者たちとの想いの交叉が記録されています。ぜひご一読いただければ幸甚に存じます。

さて、「道なき道を行く」、「道に迷う」、「道が開ける」、「道を外れる」、「道に背く」、「道を失う」などなど…… わたしたちは、「道」という語を使った、いろいろな言葉を知っています。でもふと考えてみると、そのような「道」が語られるとき、そこでは常に、その「道」の先にあるもの、たとえば最終的な目標であったり、目的みたいなものが想定されていて、その目的から、今の自分の所まで線を引っ張って来て…… それが「道」となっているように思います。そこから、今の自分を省みて、今の自分の、その歩みが「外れている」とか、「遅れている」とか嘆き、その道程の途方もないこと、遠さを想い、憂う…… 「茨の道」だとか、「困難な道」だとか云うけれど、その、どの言葉をとっても、すべてが目標に対してどうか、目標からの発想・表現でしかないように思うのです。私たちは、「道」の先にあるものは強く意識するけれど、「道」そのものを意識することは少ないように感じます。自分の歩んでいる「道」を呪うことはあっても、それを「愛おしい」と思うことが私たちにどれだけあるのでしょうか。目標に向かって、単に、それだけが目的化されること…… そのような状況こそが、実は「道」に迷うことの本当の意味ではないかとさえ思えてきます。

聖書の中に、イエスが語り残した「私は道であり、真理であり、命である（ヨハネによる福音書14章6節）」との言葉があります。言葉遊びになるのですが、私は道である／道は真理である／道は命である そんなふうに入語を代入してみると、「道」そのモノが「いのち」だ、「道」そのものの中に、「いのち（つながり）」としての「真理」がある、そう読むことができます。道の途上で経験する、失敗や挫折、成功や喜び、それは懸命に人とつながろうとしたことの証しです。人はそうした道の途上をつねに歩みながら、つながりとしてのいのちを育てていくのだと思うのです。だからこそ、その歩む道をこそ愛おしいと想えるかどうか…… 先の見えない道を往く今だからこそ、大事にしたい問いに思います。

道とは、未完と完成の間にあります。「いのち（つながり）」としての「真理」は、その道の先に目的化されるものではなく、まさに、未完としての「道の途上にある」のではないか。そこにこそ、わたしたちが目標とすべきものがあると信じます。わたしたちは、どんな「道」を歩くのか…… その「道」を誰と歩きたいと想っているのか……そして、その「道」をほんとうに愛おしいと想えるかどうか…… ボランティアセンターは、道の途上にあるとの自覚をいつも持ちつつ、こうした問いを抱えた学生たちと本気で向き合えるところで在りたいと心から願っています。

最後になりますが、本センターの働きにご協力いただきました皆さまに御礼申し上げます、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

## 「ボランティア」とは「私は何者か」を問われる経験

ボランティアセンター副センター長 結城 俊哉

「ボランティア」とは何でしょうか？何かに「困っている・悩んでいる・苦しんでいる人」のために、何か「よきこと／善」を成すことなののでしょうか。

私は、ボランティアの本質について考える際、「利己と利他の関係」について考えることがあります。『デジタル大辞泉』によれば「利己」とは「自分の利益だけを考え、他人のことは顧みないこと：利己主義・利己心・利己的」、「利他」とは、「①他人の利益となるように図ること。自分のことよりも他人の幸福を願うこと。②仏語。人々に功德・利益を施して救済すること。特に、阿弥陀仏の救いの働きをいう。：利他主義」という意味があります。さらに「ボランティア (volunteer)」については、「<志願者の意>自主的に社会事業などに参加し、無償の奉仕活動をする人。」という意味があります。全カリ科目『ボランティア論』を担当しながら私は、「・・・社会事業などに参加し、無償の奉仕活動する人」という言葉にとられる必要はあまりないように思っています。そして、「ボランティア活動」は「他者への奉仕活動を基盤とする利他的な活動」ではない！と考えるようになっていきます。尚、その詳細については全カリ『ボランティア論』を履修して頂ければ納得してもらえらると思っています。

そして、私が「ボランティアとは何か」と尋ねられたとしたら、「うーん、ボランティアって、利他的活動でありながら利己的で主体的な判断と決断が迫られる極めて人間的な行為ではないか。」と考えるようになっていきます。つまり、最後は他者にボランティアとして関与する行為は「私とは何者か：アイデンティティ (identity)」を問われ、問い続ける経験になるのだと思うのです。換言するなら、他者を鏡としながら「自分とは何者か」という「問い」と出会うことになると思うのです。

まさに、本学の「ボランティアセンター」とは、そんなチャンス（機会・契機）を提供する素敵な空間なのです。是非、積極的に訪れてみてほしいと願っています。

---

## 次の10年に向けて

ボランティアセンター副センター長 伊藤 実歩子

2022年度は、コロナの様子を見ながら、大学の講義だけでなく、ボランティアセンターやそれぞれの団体でも対面での活動が再開できるようになったことは大変喜ばしいことでした。関係各位に心より感謝申し上げます。

コロナ禍にあって、わたしたちはオンラインがとても便利なツールであることを発見しました。もうこれなしには日常に戻れないと思うほどです。日本はおろか世界のどこにいてもすぐにつながり、参加し、これまでになく多様な人々の声を聴くことができます。しかし、こうした便利さとは裏腹に、オンライン化が進むにつれ、複数人が同時に発言したり、小さなうなずきやつぶやき、場の前後に立ち話をしたりすることがいかに大事なことであるかを痛感しました。

ボランティア活動の多くは、こうした対面での営み、その多くは小さなやり取りを何よりも大切にしています。今年度、それが再開できたことの喜びは、なにものにも代えがたいと多くの学生は思っていることでしょう。こうした活動が来年度も継続できますよう、皆さんにお力添えをお願いすると同時に、学生、教職員一同で頑張っていきたいと思っています。

2023年度、立教大学ボランティアセンターは記念すべき20周年を迎えます。ボランティアの基本である人と人とのつながりを大切にしながら、より多様な人々に出会えるようにオンラインも活用し、次の10年の取り組みを充実させていきたいと考えています。